



Title	老人保健法施行5年を振り返って : その評価と課題
Author(s)	高島毛, 敏雄
Citation	大阪公衆衛生. 1989, 56, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83673
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

保健計画部会事業より

老人保健法施行 5 年を振り返って

— その評価と課題 —

***** 大阪大学医学部公衆衛生学教室 高鳥毛敏雄

大阪公衆衛生協会保健計画部会は、「老人保健事業」をテーマとして講演会、実践報告会、そして交流会を開催した。河内平野を一望する大和文化の寺社史跡に囲まれた丘陵地に、本年 3 月にオープンしたばかりの大阪府国民年金健康保養センター「サンヒル柏原」を会場とした。7 月 14 日、盛夏の頃であったが、予想を越える 120 人以上の参加者があった。

老人保健法の各事業は、出発時点には各市町村とも実施に不慣れであったが、施行後 7 年を経て、次のステップを真剣に考え評価してみる時期にきているだろうということから今回の企画がなされた。

健康診査の受診率が上がると

午前、保健計画部会の多田羅浩三会長による「老人保健法施行 5 年を振り返って—その評価と課題—」のテーマで基調講演が行われた。

昭和 62 年に、全国の中規模の市の老人保健事業の実績と国民健康保険医療費について、調査を行った。その結果は、

- ① 老人保健事業の一般健康診査受診率が高くなると一人あたりの入院日数が少なくなること
- ② 一般健康診査受診率が高くなると一人あたりの診療費も低くなっているということ
- ③ 一般健康診査受診率の向上には人口当たりの市の保健婦数が関連していることと出ている。国や大阪府から各市町村に一般

健康診査受診率を高めるように指導がなされていたが、医療費も含めたマクロ的な視点でみると、この目標の設定は誤りでなかったというものだった。

今回の基調講演の内容は、老人保健事業に積極的に推進していくことの意味を改めて明確にするものであった。

老人保健事業の取り組み

午後には、老人保健事業の実践例の報告が行われた。ここでは、保健事業の企画にあっている市町村の『事務職』、直接的に事業の実務にあっている市町村の『保健婦』、そして『保健所職員』という 3 つの立場から分かれて報告が行われた。各セクションは、大阪府下の市町村の中から 3 ケ所、政令市から 1 ケ所の計 4 ケ所から報告を受ける形式がとられた。

『事務職』の立場からは、まず豊中市の本岡和己成人保健係長が報告した。市が策定した保健計画に基づき、校区ごとに健康推進委員を設置して地域ぐるみの健康管理意識の高揚を図っていること、40 歳時の計画健診を始めたこと、国民年金加入者で 40 歳になった人に「豊中市民の健康づくり読本」の配布をしたこと、健康情報誌「ヘルシーライフ」を全戸配布したことなどであった。

柏原市からは、三浦博美健康推進課課長代理が、保健事業を利用した市民ごとに個人カードを作成し、個人の記録を整理していることを報告した。

岬町の国民健康保険担当の南康明係長は、国民健康保険の医療費の観点からみて、老人保健事業が国民健康保険医療費によい影響を及ぼしているとの報告を行った。

東大阪からは、中保健所の北江文夫保健予防課長が、保健所を中心とする保健事業の現状について報告した。住民健診の効率的な実施に工夫をしていること、機能訓練については社会的リハビリに焦点を合わせて実施していること、在宅介護の分野の活動に取り組み始めていることなどであった。

『保健婦』の立場からは、高槻市、門真市、十子町、堺市の保健婦から報告がなされた。

高槻市の岐部美成子保健婦は、昭和62年度より「ヘルスパイオニアタウン」の指定を受けて、保健事業の推進に努めている様子を報告した。

門真市の曾我部ゆかり保健婦からは、市の保健婦活動の業務量についての内容だった。家庭訪問の割合が高いことが、他方の保健婦の関心をよんでいた。



堺市の登美丘保健センターの平尾英津子保健婦は、老人保健事業の中の訪問指導事業を中心に報告を行った。また、平成元年3月に老人介護者の会が設立され、家庭看護教室が開催されていることなども報告された。

最後に『保健所職員』の立場から、吹田保健所摂津市所の鈴木充子先生は、市の市民総合健診受診者について高血圧者を中心に事後指導に力を入れていること、それに関連して

昨年行った高血圧事後指導ネットワークモデル事業について紹介した。

狭山保健所の古森俊輔先生は、老人保健事業の中でも実施の遅れている機能訓練事業について、府下の市町村の実施状況をもとに実施上でのポイントについて話をした。

尾崎保健所の坂戸純也先生は、保健所がスタッフとして住民健診やその結果説明会や衛生教育をバックアップしている現状をユーモラスに話した。また、管内の岬町の健康指標が悪いため調査を行い、対策を図ろうとしていることを報告した。

大阪市西成保健所の副主幹中井恵美子さんは、老人保健事業を実施している保健所の立場からの報告をした。大阪市は、健康指標が悪いため健康（ヘルス）の10カ年計画を立て市民の健康水準の向上に努めていること、また大阪市は独居老人の比率が高いこともあり、保健所ではねたきり予防教室など、虚弱老人への対応を進めてきていることなどの報告だった。

未来に向けての思索

夕方の参加者による交流会では、元副知事の中谷肇先生が大阪の公衆衛生行政の歩みについて話をされた。徳川時代には弱い人間がなくなっていたので、人口がその間一定に保たれていたのが、明治以後人口増加し、現在は様々な健康水準の人々が生きる社会になっているということから、それに対応するよう社会システムの変容が不可欠であることなど含蓄のある話であった。

今回の保健計画部会の事業は盛りだくさんなものであったが、保健事業の実績を一步一步積み重ね、しっかりとした足取りで事業を展開し始めている府下の市町村の状況が印象に残った。今後の発展に大きな期待をいだかせられるものであった。